

2018年12月2日の説教（要旨）

聖書 ローマの信徒への手紙 5章 6～8節

説教「不信心な者のために」

日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松牧人

ローマ書5章の冒頭はこの手紙の一つの山場であり、信仰の急所が語られているところです。「わたしたちは知っているのです。苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです」。(3節b～5節)とパウロは書いています。主イエス・キリストによって神との間に平和を得た私たちは、希望から希望への道をたどることができるのだと言うのです。その希望とは「神の栄光にあずかる希望」(2節)で、決して裏切られることはないと言います。なぜなら、何があろうと私たちには神の愛が注ぎ込まれているからです。それに続いて、パウロはその神の愛とはどのようなものであるかについて語っています(6～8節)。

ここでは、神の愛が注がれているということが、私たちを包み込む雰囲気であるとか、私たちの主観的な心情とか思い込みではなく、客観的に裏付けのある確かな出来事だということが述べられています。神の愛は、主イエス・キリストの生涯と死において現されたのだということ、神の愛は主イエスの十字架の死を抜きにして語るができないのだということが語られているのです。

「実にキリストは、わたしたちがまだ弱かったころ、定められた時に、不信心な者のために死んでくださった」(6節)とあります。主イエス・キリストの十字架の死は、私たちがまだ弱かった時に起こったと語られています。この弱さとはどういうことでしょうか。それは私たちの心や肉体の弱さということとは少し違うようです。この弱さを言い換えている言葉を拾ってみると、「不信心な者」(6節)、「まだ罪人であったとき」(8節)、「敵であったとき」(10節)といった言葉がそれにあたります。神を無視し、神に背いて私たちが「弱かった」と表現されているのです。パウロ自身がかつてそうであったように、たとえ人の目にいかに勇ましく輝いて見えていたとしても、神が主イエス・キリストによって私たちに救おうとされる御心を知らされたとき、それまでの主を知らなかった生き方は本質的に弱かったということになる。主イエスの十字架の死は、まだ弱かった私たちのため、神を崇めることをせず、敵対し、背いていた私たちのために起こったのである。

「正しい人のために死ぬ者はほとんどいません。善い人のために命を惜しまない者ならいるかもしれません」(7節)とパウロは書いています。何を言おうとしているのでしょうか。正しい人と善い人に区別をつける読み方もありますが、正しい人も善い人も結局同じタイプの人たち、一般的に見て正しく好ましい人たちと読んでよいのではないのでしょうか。すなわち、パウロは、人間同士の愛においてもその人のために死ぬということが少しはあることを認めながら、それはつねに相手次第であって、少なくとも自分

に敵対する人のためにいのちを投げ出す人はないであろう、と言うのです。

しかし、「わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました」(8 節) とパウロは書くのです。主イエス・キリストの死は、私たちが正しい人であったからとか善人であったからとかいうことではありませんでした。私たちに神の愛を要求できるような何かがあったわけでは決してなかったのです。けれども、何の条件も理由もなく、何の価値も魅力もない者たちのために、キリストは死んでくださったのです。これが神の愛でした。

この神の愛は、パウロが敵であることをやめたときに始まったわけではありません。パウロが教会とキリスト者を激しく迫害し、自らの義と熱心を誇っていたとき、まだ神に敵対していた時にすでにもう注がれていたのです。神の方から始められていたのです。その神のまなざしはパウロを捕えて離さなかったのです。そのような自分自身に対する神の愛の発見が彼の回心となりました。

私たちの場合も皆同じように、先立つ神の恵みに気づかされて、今の恵みに導き入れられたのです。信仰を告白するとか、洗礼を受けるとは、自分が神さまのことが分かったということではなく、神さまに捕えられている自分に気づかされ、それを認めるという事柄です。

パウロがこの手紙で初めて口にした神の愛、それは主イエス・キリストが罪人である私たちのために死んでくださったことです。神の愛はただちに主イエスの十字架と結びつけられています。もはや十字架抜きに神の愛を語ることはできないのです。十字架抜きに神の愛を語った方がつまずきは少なく、心地よく、多くの人に気に入られるかもしれませんが、神の愛は私たちを包み込むムードではありません。私たちのために起こったイエス・キリストの出来事なのです。

ヨハネも神の愛を説いてこう言っています。「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります」(ヨハネー 4 : 10)。

神はその独り子をこの世に遣わしてくださいました。しかし、この世に来られた御子の目ざす道は、誕生の時からゴルゴタの十字架でした。神は、神を無視し、敵対する世のただ中にご自身の独り子を送り込まれ、御子は神に逆らう者たちのために十字架につかれました。それが神の愛の決断でした。それならば、御子のご降誕を祝い喜ぶとは、この神の愛の決断に驚き、畏れ、ひれ伏すこと以外にないでしょう。